

(報告書)

江戸時代ロシア漂流者の記録にみる嗜好品文化の研究

江口泰生 (岡山大学)

駒走昭二 (神奈川大学)

久保蘭愛 (愛知県立大学)

1. 研究目的

18世紀初頭、ピョートル大帝の命により日本人漂流民が保護されるようになった。ゴンザ、二世タタリノフ(日本名「三八」)、通訳善六などで、彼らの言葉を記録した文献がある(A)。

18世紀末に通商上、漂流民を帰国させることも行われるようになった。伊勢の大黒屋光太夫、仙台の津太夫などである。またロシア人ゴロウニンが捕捉された。彼らもたらした情報や書物が元となり新たな学問が起こった(B)。

(A)で資料的価値が高いのは、(ア)薩摩漂流民ゴンザ関係資料、(イ)アンドレイ・タタリノフ(Андрей Татаринов、1752?~?)関係資料、(ウ)ニコライ・レザノフ(Николай Резанов、1764~1807)関係資料などである。これらはロシア人の立場から日本語を観察し、キリル文字などで日本語を表記していて、語形・清濁・母音融合・無声化・有声化などが詳細にわかる。また18・19世紀の鹿児島方言・青森南部方言・仙台石巻方言などを反映しており、明治以降のメディアの影響を受けていない方言資料としても有力である。そこでこれらをキリシタン資料・朝鮮資料・中国資料などの外国資料の一環とみなし、「ロシア資料」とよぶ。それらの成立事情については村山七郎『漂流民の言語』(吉川弘文館、1965)などが詳しい。ロシア資料について、原文名・成立年・種類・邦名・翻刻翻訳・特色などについて記す。

まず(ア)。(1) Вокабулы Преддверие Разговоров Японского Языка、1736年成立の分野別単語集、『露日単語集』。村山前掲書に翻訳があるが、鹿児島県立図書館などのマイクロフィルムなどで確認が必要。

(2) Преддверие Разговоров Японского Языка、1736年成立の分野別例文集、『日本語会話入門』。チェコの教育学者コメニウス(J.A.Comenius、1592~1670)のJanuae Latinitatis Vestibulum(『ラテン語の前庭』、1633)を基にしたロシア語日本語対訳例文集。村山前掲書に翻訳があるが、鹿児島県立図書館などのマイクロフィルムで確認が必要。これらにはアクセント符号があり、木部暢子『西南部九州二型アクセントの研究』(勉誠出版、2000)の分析がある。

(3) Краткая Грамматика 1738年成立の文法書、『簡略日本文法』。村山七郎「簡略文法について」(『文学研究』66、1969)に翻訳がある。

(4) Новый Лексикон Славено - Японский、1736年9月29日～1738年10月27日成立の12000語ほどの露日辞書、『新スラヴ日本語辞典』。村山七郎編『新スラヴ日本語辞典』(協力者井桁貞義・興水則子、ナウカ書店、1985)に索引付きで翻刻・翻訳がある。

(5) Дружеские Некоторые Разговоры Образцы、1739年成立の場面別対話集、『友好会話手本集』。草稿本と清書本がある。江口泰生『十八世紀薩隅方言における音節・音配列構造と語形式の研究』(科研報告書、2002)に清書本の翻刻・翻訳があるが、資料としては草稿本のほうが上である。

(6) Orbis Sensualium Pictus、1739年成立の百科辞典。コメニウスによる世界初の絵入り教科書『世界図絵』の日本語訳である。江口泰生・駒走昭二『図解感覚世界』(鹿児島県立図書館、1997)に翻刻・翻訳がある。

(7) краткая ведомость о бывших здесь в санктъ петербурге при академіи наукъ японского ~гдрства двухъ ~члвкахъ которые крещены в ~христианскую веру имена имъ по крещеніи первому козма а другому дамианъ、(ここ、サンクト・ペテルブルグの科学アカデミーに居た日本国家の二人の方についての簡単な報告、ふたりともキリスト信徒に洗礼を受け、洗礼名は前者がコズマ後者のがダミアンと名付けられた)という文書。村山前掲書などに訳がある。江口泰生『ロシア資料による日本語研究』(和泉書院、2006)では、1735年11月4日から1736年9月18日の間に成立と推定の調査報告書、「簡単な報告」と略称。地名を中心とする日本語が掲載されるが、語末のエ列音がイ列に狭まっているという特徴があり、年長者ソウザの言葉が反映したと推定している。

(イ)について。タタリノフは青森佐井村の漂流民サノスケの子供で、1765年にロシア科学アカデミーに入学、1782年までに露日辞書を作成したと考えられている(村山前掲書)。江戸時代の下北方言を正確に反映しており、資料的価値は極めて高い。Лексикон русско-японский、Петрова(О. Петрова) Лексикон русско-японский(Москва、1962)や村山前掲書では『レクシコン』。村山前掲書に翻訳があるが、Петроваの写真版(雄松堂マイクロに所収)で確認するのが良い。江口泰生2014～2016「A. タタリノフ『レクシコン』注釈」(継続中)の翻訳が詳細である。

(ウ)について。レザノフはロシアの外交官。仙台石巻の漂流民で通詞役であった善六の言葉を調査記録した。

(1) Руководство къ познанию Японскаго языка содержащее азбуку, первомачальныя Грамматическія правила и разговоры(日本語学習の手引き—アルファベット、初級文法、会話—)は1803年成立の日本語入門書。宮城県図書館にマイクロフィルムが

ある。田中継根「ニコライ・レザーノフ編著 日本版 田中継根翻訳『露日辞書・露日会話帳』」（東北アジア研究センター叢書第2号、2001）に『露日会話帳』として翻訳されているのは会話例文集部分 350 例ほどを抜粋したもの。他にいろは、音節一覧、活用、数量詞などが掲載。

(2) Словарь Японского языка по Российскому Алфавиту собранный (ロシア語アルファベットによる日本語辞書)、1804 年成立の 3500 語ほどの露日辞書、田中継根前掲書では『露日辞書』として翻訳・解説。宮城県図書館にマイクロフィルムがある。

(B) は本邦におけるロシア研究に関するもので、洋学の一部、蘭学などと並ぶ分野である。「ロシア学資料」と称されている。主要なものを挙げると、(1) 伊勢の大黒屋光太夫と磯吉関係、(2) 仙台の津太夫関係、(3) 捕縛されたゴロウニン関係、(4) 安芸の久蔵関係、(5) 尾張の重吉関係、(6) 薩摩永寿丸関係、(7) 越中長者丸関係、(8) 幕末プチャーチン来航時のロシア人が作成したロシア語教科書などがある。ロシア学資料にはロシア俗語や方言、習俗・文化が掲載されており、ロシア語史や日露交渉史、本邦でのロシア語教育史などの点で大変興味深い。日本語部分は漢字かな表記なので具体的音声は分からないが、ロシア語を工夫してカタカナ表記したり、日本語に対応するロシア語が掲載されたり、日本語の口語で表現されるものもあり、日本語研究に利用できると思うが、研究は資料の発掘と書誌研究が主である。今後の課題である。写本類は非常に多いが、以下、概要を述べ、入手しやすい資料を掲げる。語数も目安である。

(1) 1785 (天明 5) 年に最上徳内が北方調査したが、ロシア学の発端は 1792 (寛政 4) 年、ラクスマン一行が光太夫や磯吉らを連れて根室に来航したことにある。同年、根室越冬中に聴取が行われた。松前藩医師加藤肩吾『魯西亜実記』(村山 1967 や光太夫史料集 1 に翻刻、函館図に画像) がある。年号・官位・人名などのロシア語メモを掲載する。日本語のカ行有声化やイ・エの混同があるとされるが(村山 1967)、方言色は薄い。松前藩関係者(山下 2003 解題は松前武広と推定)がなした『亜魯齊人来朝記』(国立公文書館内閣文庫蔵、光太夫史料 1) は亜魯齊亜通辞日記・天地・乾坤などの意義分類の日本語にロシア語 517 語(成句含)を掲載した。

幕府側としては御普請役田辺安蔵の『魯西亜語類』(河合忠信編校の私家版影印、石川真弘ほか 1970 に翻刻) はイロハ順の日本語にカタカナのロシア語 1107 語を掲載。幕府役人篠本廉(竹堂)が 1793 (寛政 5) 年序文の『北槎異聞』をなす(光太夫史料 2・『北門叢書』6 に翻刻、早大図や函館図に画像)。その第四巻「魯西亜語」は天文・地理などの意義分類で 673 語を掲載。1794 (寛政 6) 年、幕府医官桂川甫周が光太夫の体験などを『北槎聞略』にまとめ、1262 語の単語・短文を

収録した（亀井高孝 1937、庶民生活史料 5、雄松堂マイクロ）。光太夫資料の第一である。甫周の実弟森島中良『魯西亜寄語』には 1299 語を掲載するが『北槎聞略』と近似する。1796（寛政 8）年、源有『魯西亜文字集』（吉川弘文館 1967 に写真）、同『魯西亜辨語』（近藤出版社 1972 に写真）、後者は 1276 語の露日・日露辞典で、両方を備えたところに工夫がある。村山七郎はイ・エの混同、命令形ロなど関東以北の方言を反映するとするが方言色は薄い。拗音に横線を付すなどの工夫がある。源有について亀井高孝は今井元安と推定。

ほかに「大黒屋光太夫ロシア漂流一件（神昌丸魯国漂流始末）」（これくしょん 3）は月名・日付・親族名などが 135 語メモされる。1804-18（文化年間）年「実録光太夫磯吉漂泊物語」（光太夫史料 4）は法話の聞書の類で口語的である（山下 2003）。

近年、磯吉関係資料も注目されはじめた。『漂流私記』は 1794-95（寛政 6-7）年に江戸廻船問屋坂倉の手代小八による磯吉の話の聞書で、155 語のロシア語単語メモがある。『魯西亜国漂舶聞書』は山下 2003 によれば幕府役人の著で 1798（寛政 10）年以前とされる（光太夫史料 2）。磯吉の話に基づくもので、ロシア語単語集はないが、「三之助倅、アンダライ・イワノイチ、苗字はタ、リンといふ。此の人、大酒して死す」は（A）-ウの著者についての記事で注目される。1804（文化 1）年以降の『北洋実録』乾坤 2 冊（国文研に画像）のうち、乾冊は「漂舶聞書」と一致するが、坤冊は一反木綿・出・板・否などのイロハ順の日本語にカタカナでロシア語 1077 項目を掲載し、「漂舶聞書」とは異なっている。磯吉は 1798（寛政 10）年に幕府の許可が出て勢州南若松村への一時帰郷し、『魯西亜詞記』（岩井 2011 に写真）はその時の磯吉の話の記録である。破擦音を表す工夫がある。心海寺住職実静著『極珍書』（光太夫史料 4）は乾坤・器材など意義分類の日本語に 417 語のロシア語をあてる。

（2）1804（文化 4）年、ロシア使節レザノフは仙台漂流民津太夫らを伴って来航。仙台藩医大槻玄沢・藩儒志村弘強らが事情聴取、『環海異聞』にまとめた（杉本つとむ 1986・これくしょん 6 に翻刻）。巻八「言語」編に天文・地理など意義分類で 642 語のロシア語が掲載。岩井 1986 はロシア語のカタカナ表記を分析した。ロシア語の音韻をどのようなカタカナで表現するかなど、日本語の分析にも応用できそうに思う。

（3）1811（文化 8）年、ゴロウニンらが国後で捕捉された。松前までの護送役南部藩士松岡良之丞からの聞書が 1829（文政 12）年『おろすけ人言』（奥平貞守写、北大図に画像）である。また村上貞助自筆と推定される『幽囚松前ゴロウニン口述露語控』（函館）がある。後者は会話、海事用語の他に石・稲妻のイロハ順の語彙集で 503 項目がある。特に会話は「ズダラステ 息災て御座るか」など

の「息災」、「ウヲツカ ビテヤ 酒飲され」などの命令形サレ（シャレ）、「ダア \ / そふだ \ /」などの指定辞ダ、カタ行有声化など東日本方言で訳されていて注目される。

捕虜となったゴロウニンたちに副艦長リコルドが宛てた手紙は幕府の手に渡り、江戸の蛮書和解御用へ送られ、馬場佐十郎が書簡和解に挑んだ。その過程は 1812（文化 9）年頃、『北辺紀聞』（早大図に画像）に記録され、我が国のロシア語事始とされることもある（平野満 1993）。ゴロウニンのロシア語指導を受けた馬場佐十郎は 1813（文化 10）年『魯語』（静嘉堂文庫）、これは天文などの意義分類で 1242 語、成語 215 例をロシア語原綴（カタカナではない）で表記した。自立語は横書き、テニヲハを縦書きしており（杉本 1976～1982）、表記史からも注目できる。『文法規範』（静嘉堂文庫）は日本初の本格的ロシア語文法書である。

（4）安芸の久蔵の漂流譚は 1814（文化 11）年『魯齊亜国漂流聞書』（木崎 1971 に翻刻）、263 語の単語メモが意味ごとに並んでいる。

（5）尾張の小栗重吉の漂流譚は三河新城菅沼家の御用人で国学者の池田寛親が 1822（文政 5）年『船長日記』としてまとめた。ロシア語はあまりないが、漂流の壮絶な体験が迫ってくる。重吉は 1821（文政 4）年『ヲロシヤノ言』を刊行、本邦初のロシア語単語集の出版である（340 項目）。

（6）薩摩の永寿丸は藩士川上親信が 1825（文政 8）年序文の『漂海紀聞』（玉里文庫）にまとめた。巻五附録「言語」に 686 語の部門別露和語彙集と対話 13 例がある（木崎・井田 1965 に翻刻）。『北際漂譚』（国文研に画像）は同一書である。1817（文化 14）年、江戸田町の薩摩別邸に引き渡された漂流民から藩士木場貞良が取り調べしたのが『魯西亜漂流記』（木崎 1982 に翻刻）で、下巻に「ロシア言語篇」にロシア語 774 語、ロシア会話文 13 例があるが、『漂海紀聞』と近似する。

（7）越中富山の長者丸の漂流譚を加賀藩士遠藤高璟が 1849（嘉永 2）年序文『時規物語』（前田尊敬閣文庫・宮内庁書陵部蔵）に纏めた（庶民生活史料 5 に翻刻、国文研に画像）。巻九に意義分類の日本語 1115 項目に露（829 語）・米・サントウイスの単語をあて、また露・米・サントウイスから日本語が引けるように工夫されている。

（8）1853（嘉永 6）年、来航のプチャーチン使節随員ゴシケビッチは掛川藩士橋耕齋を助手として 1857 年に日本語・ロシア語辞書『和魯通言比考』（天理善本叢書、函館図、雄松堂マイクロ）を刊行、15800 語を収録する。中村喜和 1986 は見出し語は瓜生政和編『真草両點早引節用集』に倣ったと推定。また来航時のロシア人所有の本を幕府蕃書調所榊令輔が翻訳し、1855（安政 2）年『魯西亜字筌』（早大図は安政 2 年の刊、雄松堂マイクロは安政 3 年の刊）を刊行した。カタカナ付き原綴で 86 項目、和露蘭の対訳語彙集である。これと村上俊英『三語便覧』

を引用して 1860（万延 1）年に松園梅彦が『五国語箋』（杉本 2000 に影印）を刊行した（63 語）。プチャーチン来航に随行した司祭ワシーリー・マホフの息子イワン・マホフは函館のロシア領事館員をしながら 1961（万延 2）年『ろしやのいろは』（函館図に画像）を出版した。ロシア語の初級入門書である。

以上のように日本では 18 世紀末に新しい文化と遭遇し、ロシア学が生じた。

これらの中に、煙草や酒などの嗜好品に関する記述がある。江戸時代に日本人が予期せぬ事情でロシアへ渡ったとき、ロシアの文化とどのように接するのか、嗜好品とどのように接するのか、さらに具体的に述べると、江戸時代の日本人がはじめてワイン、ビール、ウォトカに接した時に、それらを日本の酒の語彙とどのように対応させたのだろうか。その感想は極めて直感的であるがゆえに、さまざまな酒類に接した現代人とは違って、むしろ本質をついているのではなかろうか。

また江戸時代の日本人がロシアの煙草や煙草文化に触れた時に、どのように日本語に対応させたのだろうか。

本研究は前掲の、特に（A）-（1）、（A）-（2）、また（B）を利用し、これらに記録されている江戸時代の嗜好品の具体例、嗜好品への意識や嗜好品を取り巻く文化、関連する語彙について考察する。これによって、江戸時代の日本人がロシアの酒類や煙草文化についてどのように感じて、どのように翻訳したのか、日本の文化とどのように対応させたか、を明らかにすることによって、現代のようなさまざまな酒類や煙草類の影響がなかった時代の、嗜好品への意識を明らかにしようとした。

2. 研究方法

鹿児島県立図書館所蔵マイクロフィルムや九州大学所蔵写真や筆者の入手した画像などと（A）-（1）江口泰生・駒走昭二が訳した『世界図絵』（江口・駒走 1997）、江口泰生・米重文樹訳『友好会話手本集』（江口泰生 2002）、（A）-（2）江口泰生が訳した『レクシコン』（江口泰生 2014 ほか）、収集した（B）の文献を参照して用例を抜き出し、分類整理して、ロシアの酒をどのように日本語に訳したか、ロシアの煙草類をどのように日本語に訳したかを解明する。またそれらの比較からロシアの酒と日本の酒の対応を明らかにする。

3. 研究成果

薩摩方言を反映するゴンザ資料、青森下北方言を反映するタタリノフ資料にみられる嗜好品、ロシア学資料の「酒」類について対訳を中心に考察した。

ゴンザ資料では「酒」「甘酒」「焼酎」「泡盛」というように多様な酒の種類が見つかったが、タタリノフ資料では「酒」「濁り酒」「諸白」といった、日本酒の枠内にかぎられた語彙が見つかっただけであった。これは当時の地域性を反映したものかと思われる。

また現代の鹿児島で「酒」といえば焼酎を指すが、18世紀の鹿児島では「酒」は「日本酒」を指していた。古くは日本酒が無標で「酒」、焼酎が有標で「焼酎」と呼ばれたのに対し、現代では焼酎が無標の「酒」、日本酒が有標で「日本酒」と呼ばれる、というように関係が逆転したようである。九州北部では「酒」といえば「日本酒」を指するのが普通である。したがって、「酒＝日本酒」が古い語彙体系であったと思われる。この「酒＝日本酒」体系は、18世紀以降に鹿児島で「焼酎」が一般的になり、大いに普及したことによって「酒＝焼酎」体系へと転換していったものと思われる。

青森下北方言を反映する『レクシコン』では、「ウオトカ」に「諸白」、「ワイン」には「酒」、「ビール」には「濁り酒」という訳があてられていた。

18世紀において、薩隅方言と青森下北方言においてワインに日本酒が対応させられていることが明らかとなった。現在、日本酒を海外展開する方向の一つとして、ワインの味に似せるという方向があると思われるが、ワインと日本酒が似ている、という直感は既に18世紀の日本人にも存在していたと思われる。ゴンザ資料ではウオトカに「泡盛」が対応させられていることもあわせて興味深い。

ビールに「甘酒」「濁り酒」が対応させられていた。このことから、18世紀のロシアのビールが甘く濁ったものであったことがわかる。特に「甘酒」と訳してあることは、ロシアでは近年までビールを清涼飲料水として扱っていたことを想起させる。清涼飲料水という点では「甘酒」と同様である。

ロシア学資料においても「酒」に「вино」（ワイン）があてられることが多い。『北槎聞略』などでは「濁り酒」が「ビール」に対応させられていることはタタリノフ資料と同様であった。上等な酒としては「ウヲツカ」が当てられていた。『環海異聞』や鹿児島永寿丸の資料『魯西亜漂流記』では「焼酎」が見出し語として上がっていて、これには「ウヲツカ」で訳されていた。ビールと製造法が似ているクワスには「酢」類の訳語が当てられていた。

『レクシコン』の喫煙関係の語彙を調査した結果、「噛み煙草」に「カド」（身欠きにしん＝乾燥させたニンジン）の訳があててあった。「噛み煙草」は日本に普及していなかったためか、味の共通点より口に含む行為の共通点がほうが目立ったのであろう。西洋において、火気厳禁の船内では「噛み煙草」が用いられていたと思われる。

また18世紀のロシアの船員の間では煙草が「壊血病」への薬効があると考えられていたと思われる。

ギヤマン煙管に相当する「ビズギリ」という語が青森下北方言に存在したことがわかった。ただし、これが日常品なのか、贅沢品なのか、商業品なのかは不明である。今後の課題である。

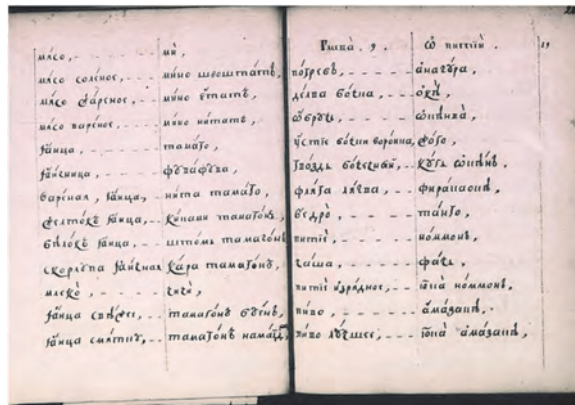
4. 考察

4. 1 薩摩漂流民ゴンザ資料の「酒」「焼酎」「甘酒」「泡盛」

4. 1. 1 『露日語彙集』の場合

『露日語彙集』(Вокабулы Преддверие Разговоров Японского Языка)は直訳すると、『日本語会話入門語彙』とでもなるか。1736年成立の分野別の単語集である。チェコの教育学者コメニウス(1592年～1670年)の教科書の入門書に基づいている。右側にロシア語、左側にその日本語訳があてられている(図1参照)。

(図1)『露日語彙集』8章末尾から9章冒頭



ゴンザ資料の中でもっとも初期に作成されたものである。ゴンザは漂流時、11歳程度の少年だったと考えられている。常時、酒を嗜んでいたとは思えないので、あるいはゴンザと一緒にロシアへ漂流した年長者ソウザの言葉も入り込んでいるかもしれない。特にソウザ存命中の『露日語彙集』には多彩な語彙がみられるからである。

『露日語彙集』には「酒」に関する語彙が9章にみられる。ちなみに「煙草」に関する語彙は見られない。これは『露日語彙集』の元となったコメニウスの著作そのものに煙草の記述がないためである。酒類に関しては以下のような語彙がある。

- пиво (ビール) アマザケ
- пиво лучшее (最高のビール) ヨカ アマザケ
- тонкое пиво (細いビール (=まずいビール)) ウスカ アマザケ
- вино непію'щій (酔わない酒) шо'чу юка (シヨチュ ヨカ)
- вино во'дка (ウオトカ酒) авомо'й (アヲモイ「泡盛」)
- вино ренское (ラインワイン) ヨカ サケ

以上をまとめると以下の表1を得る。

(表 1)

ロシア語	『露日語彙集』訳
ビール	甘酒
最高のビール　　まずいビール	良か甘酒　　薄か甘酒
酔わない酒	焼酎　　良か
ウオトカ酒	泡盛
ラインワイン	良か　　酒

「ラインワイン」は上等品であったのか、「良か酒」という訳があてられている。「良い酒＝飲んでも酔わない酒」に「焼酎、良か」があてられる。

またウオトカに対しては「アヲモイ」とあてられている。「泡盛」に相当すると考えられる。ウオトカも泡盛も同じ蒸留酒の類であり、アルコール度数が高く、類似性がある。

「泡盛」という語自体は最も早いのは 1671 年（寛文 11 年）、琉球王国の尚貞王から四代目将軍徳川家綱へ贈られた献上品の目録の「泡盛」の記録であるという¹。

また俳諧『炭俵集』（1694 年、元禄 7 年）に

「さるべき人、僕が酒をたしむ事を、かたく戒め給ひて諾せしむ。しかるにある会にそれをよく知て、あらかあはもりなど、名あるかぎりを取出て、あるじせられければ、汗をかきて

改て酒に名のつくあつき哉（改めて、酒の講釈を客人にすると、自分の酒好きがばれてしまいそうで、なんと暑さ以上に汗の出ることよ）　利牛」

とあって、17 世紀後半あたりから「泡盛」という語が見られる。『露日語彙集』の用例は比較的早いほうで、薩摩に「泡盛」が伝播した証拠と考えられ、貴重である。

「アヲモイ (awomoi)」という語形も興味深い。薩隅方言（九州も）では語中尾のり音はイ音へ交替する。したがってイの部分は薩隅方言の規則どおりである。しかしアヲ部分がアヲとなっているのは他の例とは異なっている。『新スラヴ日本語辞典』で「泡」は「a b a　アヲ」である。したがって「アヲモリ」が「アヲモイ」になったとすれば、当時「アヲ」（「泡」、あるいは「粟」）という語源意識がないことが必要である。「アヲ」（泡～粟）」という語源意識があったならば、「アヲ」にはなりにくい。

「泡盛」の語源についてはいくつかの説があるらしい。『俚言集覧』（1797 年（寛政 9）以後 1829 年（文政 12）以前の成立）によれば、「アヲモリ」とは粟を原料とした酒の称で

¹ 沖縄県酒造組合「泡盛百科」 <http://www.okinawa-awamori.or.jp/about/03.html> による。

あるが、一説に、瓶からつぐ時、泡立って盛りあがることから、ともいう。18世紀末期には「粟」「泡」の二説があったということであるが、18世紀の薩摩では「泡盛」についての意識は「粟」「泡」説から離脱していたと思われる。だから「アヲモイ」という語形であったと考えられる。

日本語では awa (アワ) が au (アウ) と音韻変化することは多々ある。カワモリ (川守) がコーモリになるためには、カワモリ→カウモリ→コーモリという音韻変化を辿った。ハハキがホーキになるためには、ハハキ>ハワキ>ハウキ>ホーキという音韻変化を辿った²。

アワモリが*アウモイ (*は推定形を表す) になりやすかったものの、ウの前の広母音 a とウの後ろの半広母音 o の間にあつて狭母音ウが広母音化を起し、かつワ行音の唇音性を保持するためにヲ音 (wo) になったものと思われる。またこの時点では既に「粟」あるいは「泡」という語源意識はなかったものと考えられる。語源意識が存在したならば、アワ→アヲは阻止されるであろう。

また、『沖縄語辞典』(国立国語研究所資料集5、1969)を見ると「泡盛」は沖縄では以下のおりに発音されていることがわかる。喉頭の閉鎖を?で転記して示す。

?aamui ①泡盛。普通は単に saki という。

これは「アームイ」という語形であり、琉球三母音化の語形である。

我々は「泡盛」を「アワモリ」と呼んでいるが、沖縄方言「アームイ」をそのまま聞いてその発音を真似しているわけではなく、「泡盛」という漢字表記を訓読した標準語形が通行しているわけである。それに対してゴンザ資料では「泡盛」の標準語形ではなく、薩隅方言の実際の語形が出現しているものと思われる。

4. 1. 2 『新スラヴ日本語辞典』の場合

『新スラヴ日本語辞典』(“Новый Лексикон Славено—Японский”)は1736年9月29日～1738年10月27日成立の12000語ほど(駒走昭二2015によれば11361語)の露日辞書で、『新スラヴ日本語辞典』と呼ばれている。村山七郎編『新スラヴ日本語辞典』(協力者井桁貞義・輿水則子、ナウカ書店、1985)に索引付きで翻刻・翻訳がある。

дрождь (酵母)	—	ама'закенсоко (アマ'ザケッソ'コ甘酒の糟糠)
водка (ウオトカ)	—	авомо'й (アヲモイ「泡盛」)
пиво (ビール)	—	амазаке (アマザケ 甘酒)
пивоваръ (ビール醸造人)	—	амазакени (アマザケニ 甘酒煮)
вино (葡萄酒)	—	са'ке (サケ 酒)

² 亀井孝論文集5『言語文化くさぐさ』26頁。

村山七郎編『新スラヴ日本語辞典』（協力者井桁貞義・輿水則子、ナウカ書店、1985）では「ビール醸造人」と訳すが、「ビール醸造」と訳したほうが良いと思う。日本語訳に「人」の意味は含まないからであり、かつ「甘酒煮」と「ビール醸造」が一致するからである。これをまとめると次の（表2）になる。

いぬかいて 2016 は「пиво」（ビール）に「амазаке」（アマザケ 甘酒）の訳をあてることに対して、「ビールは甘くない。ゴンザは sweet の意味では『ムマカ』をつかい（アマカ）をつかわない。『アマ』は穀物の煮汁をさす（あめ）と思われる」と述べて、「甘酒」説を否定する。

しかし、「甘酒」を「甘+酒」の二語に分け、薩隅方言では「甘い」は「ムマカ」であるから「アマ酒」と訳すのはおかしい、という論法にはやや無理があると思う。どこに無理があるかという点、「甘い酒」と「甘酒」は同一ではないからである。つまり「甘酒」は全体で一語であり、その製法によって作られたものは、味が甘かろうが、薄かろうが、濃いかろうが、すべて「甘酒」である。「春風」は春の暖かな風のみを指すのであって、寒気が残る凍えるような寒い風は「春風」とは呼ばないのである。「春風」と「春の風」は同一ではない。同様に「甘酒」と「甘い酒」は同一ではない。一語を分解して、得られた形態素の意味を調査して合計しても、元の語の意味は明らかにならないこともある。そこに留意していないために無理があると思うのである。

ビールと甘酒のアルコール度数の低さ、ビールと甘酒がともに醸造によったものであること、他のゴンザ資料でもビールを「アマザケ」と訳していること、かつてのビールは少しどろりとした甘い液体であったと考えられること、ビールも甘酒もかつては清涼飲料水であったこと、訳語の語形は「アマザケ」であり「アメ」とは語形が異なること、などからビールを「甘酒」と訳したと考えるても特に矛盾はしないのではなかろうか。

（表2）

ロシア語	『新スラヴ日本語辞典』訳
ビール	甘酒
ウォトカ	泡盛
ワイン	酒

4. 1. 3 『友好会話手本集』の場合

『友好会話手本集』（Дружеские Некоторые Разговоры Образцы）は1739年成立の場面別対話集である。草稿本と清書本がある。江口泰生 2002『十八世紀薩隅方言における音節・音配列構造と語形式の研究』（科研報告書）に清書本の翻刻・翻訳がある。

例文 0074 で「どんなワインが出たか教えてくれ」という例文に対して「言いやい いけな 酒があったか？」と訳している。ワインを「酒」と訳すことは他と同様である。（表3）のようになる。

(表 3)

ロシア語	『友好会話手本集』訳
ワイン	酒

4. 1. 4 『世界図絵』の場合

ゴンザ『世界図絵』(Orbis Sensualium Pictus)は1739年成立である。以下の図2参照。これはチェコの教育学者コメニウスによる世界初の絵入り教科書『世界図絵』のロシア語-日本語訳である。教育学史、日本語教育史としても大変重要な資料とって良いと思う。図2のように左端にロシア語、中央にその日本語、右端にロシア語・日本語の語彙が並べられている。その日本語が薩隅島方言なので、方言資料としても大変貴重である。江口泰生・駒走昭二訳1997『図解感覚世界』(鹿児島県立図書館)がある。56章にビールやワインのことが出てくる。

(図2)『世界図絵』55章から56章



ВИНО (酒、葡萄酒) …… сакѣ [サケ] (酒)
 ПИВО (ビール) …… амазакѣ [アマザケ] (甘酒)

次ページに江口・駒走1997による56章の翻訳を示す。

これを整理すると、以下の表4のように訳されていることがわかる。

(表 4)

元の語	『世界図絵』訳
ワイン	酒
ビール	甘酒

他のゴンザ資料と同様である。ただし出現する語彙は少ない。『世界図絵』は教育学者コメニウスの著作であり、これに依拠しており、『世界図絵』自体に「ウオトカ」という語が掲載されていないからである。

【56】

【пивоваре】

【ніе】

ビール醸造

гдѣ вина не

имѣется

пьють пиво

葡萄酒のないところではビールを飲む

которое из'

солоту и хме

ля вкюплѣ

варится,

麦芽とホップから釜で醸造される,

потомъ въ

чаны (補入) спусникъ (上書き) нали

вается ==[и]==

その後大桶に一杯に注がれる

егда спуска

ется,уша

тами вѣпо

гребъ носи

тся и въ

бочки нали

вается,

熱が放出された時桶で穴蔵へ持って行かれ そして木樽に満たされる,

горелка из'

винныхъ дро

жден в кубѣ

спокрышкою

силою ■■

жара пома

лу вонь исте

каетъ,ка

плеть сквозь

трубу всте

кло

ウオトカは葡萄酒の酵母から醸造され 蓋をともなった蒸留器こ力と熱がかわり

少しずつ外へ流れ出て、管を通してガラス瓶に滴り落ちる

віно и пиво

когда укисае^tбываетъ уху^c

葡萄酒とビールは醸造ばくなると酸を生ずる

五十六

амазакѣ<アマザケ> ни-<ニ>

ркотъ<ルコト>.

甘酒 煮る事

доке<ドコイ> сакѣга<サケガ> на<ナ>

кая<カヤ> номаръ<ノマル>

амазакѣ<アマザケ>.

何処に 酒が 無ければ 飲まる 甘酒

донотъ<ドノト> кожара<コジカラ>

хмельсара<ヘカラ> на<ナ>

белже<ベヂェ> ==[іераго]= (ニエラユ)

іерагоръ<ニエラユル>

どのと 麴から хмель (ホップ) から 鍋で 煮えらゆる

сошчь<ソシチ> окѣ<オケ> дас-<ダス>

те<トイ> іерагоръ<ニエラユル>

そして 桶 出すとに 入れらゆる

иць<イツ> дзуръ<ヅル> уша-<ウ>

тлже<ヘヂェ> анагуре<アナグライ>

навосъ<ナフス> яма-<ヤマ>

дары<ダルイ> і==[іо]==ераго\р/<イ (ユ) イエラユル>

何時 出る ушаг (両側に棒を通すための耳付きの桶) で 穴蔵に 直す 山樽に (入ゆる→)

入れらゆる

когае<コガイエ> сакѣнто-<サケント>

кара<カラ> конкатъ<コイカト>

токкуи`<トククイ> фта-<フタ>

то<ト> чкараго<チカラト>

(上書き) фино<フィノ> читто<チット>

дзуць<ヅツ> ара-<アラ>

кѣсаме<ケサマイ> нага<ナガ>

горъ<ユル>,моръ<モル> ура<ウラ>

омоче<オモチェ> фокѣ-<フォケ>

дашь<ダシ> бідоро<ビドロ>

焦がれ 酒のとから 濃いゆと 徳利 蓋と 力と 火の ちつとづつ 屋外

さまに 流ゆる,

漏る 裏表 火気出し ビードロ

сакѣ<サケ> амаза-<アマザ>

кѣ<ケ> иць<イツ> сыно-<スイユ>

нартока<ナルトキヤ> арко<アルコ>

ткаваръ<トカカル> су<ス>

酒 甘酒 何時 酸ゆるなる時は ある事がある 酢

4. 1. 5 ゴンザ資料についての考察とまとめ

以上述べてきたことをまとめてみると以下の（表5）のようになる。

（表5）

資料	『露日語彙集』訳	『新スラヴ日本語辞典』訳	『友好会話手本集』訳	『世界図絵』訳
ロシア語				
上質のワイン	酒	酒	酒	酒
ビール	甘酒	甘酒	*	甘酒
ウォトカ	泡盛	泡盛	*	*
酔わない酒	焼酎	*	*	*

ワインには「酒」、ビールには「甘酒」、ウォトカは「泡盛」、酔わない酒には「焼酎」という訳があてられている。ワイン・日本酒・ビールなどの醸造酒類が同じ醸造酒の「酒」系統で訳されているのがわかる。「酔わない酒」というのは「良い酒」の意味であろう。薩摩の漂流民らしく、的確な訳がなされたと考えられる。

時代が下るにつれて、訳語の種類が、「酒、甘酒、泡盛、焼酎」の四種から「酒、甘酒」のように二種に減少していることにも注意される。『露日語彙集』作成時には年長のソウザも存命だったが、『友好会話手本集』『世界図絵』作成時には年長者ソウザも死去しており、ソウザの死去が語彙の種類減少やゴンザの日本語忘却に拍車をかけたとも考えられる³。「焼酎」「泡盛」はソウザの語彙だったかもしれない。

ゴンザは11歳でロシアへ渡っていると考えられているが、このように的確な訳を行うためには日本酒、泡盛、焼酎、甘酒を飲んだ経験があったと考えたほうが良いかもしれない。日本酒は正月などで、甘酒は江戸時代では清涼飲料水として飲まれていたようなので、実際に体験していたかもしれない。

また現代の鹿児島で「酒」といえば普通には焼酎を指す⁴。18世紀では「酒」は普通には「日本酒」を指したのではなかろうか。つまり古くは日本酒が無標で「酒」、焼酎が有標で「焼酎」と呼ばれたのに対し、現代では焼酎が無標の「酒」、日本酒が有標で「日本酒」と呼ばれる、というように関係が逆転したと思われる。九州北部では「酒」といえば「日本酒」を指すのが普通である。したがって、「酒＝日本酒」が古い語彙体系であったと思われる。この「酒＝日本酒」体系は、18世紀以降に鹿児島で「焼酎」が一般的になり、大いに普及したことによって「酒＝焼酎」体系へと転換していったものと思われる。

ウォトカを「泡盛」で訳すのも同じ蒸留酒であり、無色透明であり、アルコール度数が

³ 江口泰生 2006 参照。

⁴ 沖縄では前述『沖縄語辞典』で示したように、「酒」といえば「泡盛」のようである。

高く、共通点が多いからだと思われる。

4. 2 青森下北方言資料『レクシコン』にみられる嗜好品

4. 2. 1 酒について

前節でゴンザ資料の酒類について述べたので、それに引き続き『レクシコン』の酒類の用例を取り上げてみたい。

『レクシコン』とは1782年頃に成立した、アンドレイ・タタリノフ著、ロシア語・日本語対訳語彙集である。序文、語彙、例文集、数詞からなる。語彙は、左欄にロシア語（以下、「見出しロシア語」とよぶ）、中央にキリル文字で書かれた日本語（以下、「キリル文字日本語」とよぶ）、右欄にひらがなで書かれた日本語（以下、「ひらがな日本語」とよぶ）が位置する。図3参照。

『レクシコン』の解説及び写真版には“Лексикон русско-японский、ペトロワ 1962 (O.Петрова) Лексикон русско-японский ” (Москва、1962) がある。タタリノフは青森佐井村の漂流民サノスケの子供で、1765年にロシア科学アカデミーに入学、1782年までに露日辞書を作成したと考えられている。村山七郎 1965 参照。

(図 3)

Словоиспол	Далпомени	Слитоиспол
водка	водка	ウオトカ
вино	вино	サイ
пиво	пиво	サイ
морофугу	морфугу	モロフアグ
водка	водка	ウオトカ
вино	вино	サイ
пиво	пиво	サイ
морфугу	морфугу	モロフアグ
водка	водка	ウオトカ
вино	вино	サイ
пиво	пиво	サイ
морфугу	морфугу	モロフアグ
водка	водка	ウオトカ
вино	вино	サイ
пиво	пиво	サイ
морфугу	морфугу	モロフアグ

『レクシコン』8aに「водка」(ウオトカ)が見出し語にあり、これを「морфугу もろはく」(モロフアグ 諸白)と訳している。「諸白」は「日本で珍重される酒で、奈良でつくられるもの」(1603『邦訳 日葡辞書』岩波書店)とあり、高級な日本酒であつたらしい。8aに「вино」(ワイン)が見出し語にあり、これに「саги さい(マ)」とある。ひらがなは「さい」とあるが、キリル文字では「サギ」(酒)と読める。ワインを「酒」と訳している。

029bに「пйвоварья」(ビール醸造所)という見出し語があり、これに「нигорйсаги

нирудого にこりさけ にること (マ)」（ニゴリサギ ニルドゴ 濁り酒煮る所）という訳が付与される。18世紀ロシアではビールは濁ったものであったことがわかる。

ワインには「酒」、ウオトカには「諸白」、ビールには「濁り酒」という訳があてられている。以下の（表6）参照。

（表6）

ロシア語	『レクシコン』の訳
ウオトカ	諸白
ワイン	酒
ビール	濁り酒

前節で述べたゴンザ資料は薩隅方言を反映しているが、「焼酎」「酒」「泡盛」「甘酒」というように種類が多い。それに対し『レクシコン』は下北方言を反映しているが、「酒」「諸白」「濁り酒」というように日本酒の枠内で対訳が行われていて、種類が均一で多様性がない。それぞれの地方色を反映しているように思われる。

前述のゴンザ資料はビールに「甘酒」をあて、『レクシコン』は「濁り酒」をあてている。これらからすると18世紀のロシアのビールは前述のとおり「甘酒-濁り酒」のように、濁ったどろりとした液体だったのではなかろうか。

またゴンザ資料と『レクシコン』、ともにワインに「酒（日本酒）」をあてて共通している。ワインと酒が近似しているという認識は最近の料理界において良く聞く話題である。たとえばフランスの牡蠣料理や魚介類料理に「日本酒」が合うということは最近よく耳にする。プーチン大統領来日の際、山口県の日本酒「東洋美人」を絶賛したという話も聞く⁵。こうした認識は既に18世紀から存在しており、漂流民はワインと日本酒を対応させた、ごく初期の人々と言えるかもしれない⁶。こうした点からも漂流民の対訳は時代を先取りしたものとして貴重である。

4.2.2 キセルについて

『レクシコン』11に「доскань бйнъзгйри びんつきり」とある（図3参照。下から三行目）。先行研究では「コップ」と関係あると見られている」という説（村山七郎『漂流民の言語』）や、「嗅ぎ煙草」の意味でシベリア方言とする説（ペトロワ1962）があるが、定まらない。

⁵ 「東洋美人」はワインのようにやや酸味がある。

⁶ このような面からすると、日本酒-ワインの対応だけでなく、ウオトカに対する「泡盛」「諸白」、ビールに対する「甘酒」「濁り酒」というような対応は意表を突かれるものであるが、言われてみるとそのような発想も十分にありえる感じがする。「泡盛」「諸白」「甘酒」「濁り酒」のグローバル化のヒントになるかもしれない。

さて、井上史雄 1976 に「18 煙管（後部分）」の言語地図がある。昭和三〇年代の調査であるが下北方言には「煙管」を「キリ」という地域（たとえば佐井村など）が点在していることがわかる。「ビンズギリ」とはガラス製キセルで、江戸時代の「ギヤマン煙管」に相当するものではなからうか。

ロシア語古語辞書に「досканъ」=「ящичекъ」（箱 ケース キャビネット）と「табакерка」（煙草入れ）とあるのからみても、合致する。

（図 4）



（たばこと塩の博物館

「<https://www.jti.co.jp/tobacco-world/journal/chronicle/2013/08/02.html>」より転載）

そう考えると、「嗅ぎ煙草」説にも煙草を吸う行為が合致し、「煙草入れ」にも道具として対応し、下北方言「キリ」にも語形や意味も一致し、疑問が氷解する。

横田忠夫 1967 の「第五章 東北地方におけるたばこ栽培」によれば、下北では煙草の栽培はあまり盛んでなかったようである。にも関わらずギヤマン煙管が「ビンズギリ」という方言形を持っていることから、ギヤマン煙管は青森の下北地方でもかなり流通していたのではなからうか。それが日常的に用いられたのか、贅沢な商品として流通していたのかは定かではないが、大変に興味深い。

4.2.3 噛み煙草について

『レクシコン』13a に「жвака кадо」とある。平仮名日本語はなく、キリル文字日本語は「カド」と読める。この項目は村山七郎 1965 では欠落している。村山 1965 では見出しロシア語の意味が不明のときに欠落する傾向があるが、この点はさておき、『教会スラヴ語ロシア語辞典』では「жвака」は「жвачка」（反芻、反芻される食物、噛み煙草）と同じとある。現代語ではチューイングガムのようなものを指すこともあるようである。『レクシコン』では「жвака」=「жвачка」に対して「カド」という日本語訳がなされているということである。

語中有声化していたり、長音が短縮していたりする可能性も考慮して、「カド」「カト」「カトウ」「カドウ」といった語を探してみると、東北地方ではニシンのことを「カド」と言うことが『日本方言大辞典』に挙げられている。以下は料理店でみた、「カド」と表示されている「ニシン」の写真である。

(図 5)



(「カド」と表示された「ニシン」 山形市 2016.10)

しかし、それが見出しロシア語とどのように結びつくのか分からなかった。

ある日、「にしん」をネットで検索していると、ニシンのなかに「身欠きニシン」という保存方法があって、ニシンを干して固く乾燥させたものを言うらしいことが分かった。さらにネットで検索してみると、古くは身欠きニシンをかじっておやつ替わりにすることもあったらしい。

「むかし、身欠きにしんを引き裂いて食べた。硬くて赤くすき通った身を口に入れると、じゅわーっと油が出てきて、どんなおやつより おいしかった。今の子供は、あんなの、衛生、衛生でうるさくて食べさせてもらってないんちゃうかなあ」(ニフティ・ブログ「たそがれをかがやいて」2004.2.13)

<http://kurashidaisuki.la.coocan.jp/kurasi.2/k2-13.html> (2017.6.13 確認)

「その身欠きにしんを私は固いまま食いちぎって食べてます!!! やわらかい物もあるんだけど、この硬い奴をそのまま食べるのが北海道風! … (中略) … 今の人たちはそのまま食べないそうだけど、うちの母親みたいに戦時中を経験している人たちは配給されるニシンを干して保存していたので、そのまま齧りながら遊びに行ってたんですよね」(GMO ブログ「馬オタクでミスチル馬鹿の日記」2006.12.7)

<http://mike2004.jugem.cc/?month=200612> (2017.6.13 確認)

「“身欠きにしん”をおやつ替わりに食べたこと、どこかのぶろぐで書きました。私は留萌に近いところで生まれ、しばらく住んでいたこともあって、“身欠きにしん”にはお世話になりました。」(「よこはまふらのつれづれぶろぐ」2010.5.5)

http://470830.at.webry.info/201005/article_3.html (2017.6.13 確認)

ほとんどが北海道の思い出で、しかも子供の頃の思い出として書いてある。現在では北海道以外ではこうした風習はないのかもしれない。しかしかつて佐井村ではニシンが獲れたことは確実であり（佐井村役場編纂『佐井村誌』1971による）、あるいはニシンを運んだことも確実であり（同前）、佐井村が北海道に渡る拠点でもあったことも確実であるから、身欠きにしたニシンをクチャクチャと齧るということがあったかもしれないと思い至った。

「身欠きにしん」はどんなものかと「北海道製造の上乾品」の「身欠きにしん」を注文してみた。しばらくして原産地はアラスカ、「函館」とある箱に入って、茨城県の海産物直売店から送られてきた。

（図6）のように「二身」にすることからニシンという名称がついたという語源説もあった。「二親」に通じ、その卵が「カドノコ」（＝数の子）であることから子孫反映の象徴とされ、縁起物としておせち料理に用いられるということも分かった。

（図6）



かなり硬いのを手で引きちぎって、皿に盛り付けてみた。手が脂でギトギトになる。食べてみると、歯ごたえはししゃもとスルメの中間ぐらいの硬さだが、しばらく噛むと噛むたびに、いわし、鯖、さんまのような干物の脂汁が繊維からじゅっじゅっと染み出し、なかなか美味しいものである。

見出しロシア語には「反芻」「反芻される食物」「噛み煙草」という意味があるが、要するにクチャクチャと噛み続けること、あるいはそういう食物を「*жвака*」と言い、そこから「噛み煙草」という嗜好品を指すようになり、現代語では「チューイングガム」類も指すようになっているのではなかろうか。

なぜ「反芻される食物」「噛み煙草」のような語彙が『レクシコン』に掲載されているのだろうか。この答えの鍵は漂流民の記録を読んでみて判明した。仙台の漂流民の記録『環海異聞』巻七に「海上渡世する人は多くは吃烟する也。これはツンガ[按に青腿牙疳といふ病と見ゆ。別に記す。]といふ病を防ぐためなりと也」（杉本つとむ編『環海異聞 本文と研究』巻之七「土俗風習」第廿一）とある。「ツンガ」はロシア語「*цинга*」（懐血病）を写したものであろうし、「青腿牙疳」も「壊血病」の類である。したがって文意は「航海に携わる人々は喫煙する、これは壊血病を防ぐためである」という意味である。つまり、航海

に携わる船員たちは喫煙やら噛み煙草をすることで壊血病を防ごうとしたものと思われる。
煙草に薬効があると考えられてきたことは、これまでも指摘されてきている。大熊規矩男 1950 では次のように述べる（大熊 11 頁）。

煙草の葉が医薬的効果を有することが欧州大陸に紹介されたのが 1543 年頃の事で、それからというものは、米大陸から輸入された煙草の葉が万病薬の如くに持てはやされ、一時は、咳、喘息、頭痛、傷薬は未だよいとして、胃痙攣、痛風、婦人病に迄効くと信ぜられた。

18 世紀のロシアの船乗りの間では煙草は「壊血病」に効能があるということになっていて、煙草関連の語彙が掲載されることになったのであろう。『レクシコン』が海事関係の語彙を多く掲載することはペトロワ 1962 の研究に指摘されているからである⁷。

ところが、航海の際の喫煙に関しては通常の喫煙ではなかったかもしれない。「噛み煙草は帆船の乗組員の一つの持物であって、舷側で喫することは禁止されている。噛み煙草は陸上では火事が恐れられている仕事場や工場でも使用されている」とあるからである⁸。火気厳禁の場では「噛み煙草」のほうが優先されたのであろう。

つまり『レクシコン』に「жвака」という語が掲載されるのも必然性があったのである。すなわち壊血病予防のため、帆船上の火気厳禁のためという二つの理由である。

『環海異聞』⁹には次のような記述がある。

萱のような草を焼いて灰にし、煙草に摺りまぜて置き、島人が獵から帰ってきたとき、その掌へ一つまみほど与えれば、これをもらって甚だ喜ぶようであった。すぐこれを鼻にさしこみ、または歯茎の間へ入れる。煙草の気がある間は含んでいる

「嗅ぎ煙草」「噛み煙草」は火や道具が不要なので、使いやすかったのかもしれない。

一方で「噛み煙草」の習慣がなかった日本人は、「身欠きニシン」をおやつのように口に含むことからの連想で「カド」という訳語をあてたのではなかろうか。

4. 3

次に (B) のロシア学資料を調査して、「酒」類がどのように訳されているかを一覧表として示す。

⁷当該論文の内容については江口 2013、同 2014 を参照。

⁸加茂儀一 1952 訳シュバリエ&エマニュエル共著『タバコ』の 105 頁参照。

⁹池田皓 1989 の 44 頁。

(表7)

書名	成立	日本語	ロシア語	ロシア語	ロシア語	注
魯西亜実記	1792					
亜魯齊人来朝記		酒	ヒナ	ウヲツカ		
魯西亜語類	1792-93	酒	ピノ	ウヲーカ	ウポツナ	
大黒屋光太夫ロシア漂流一件(神昌丸魯国漂流始末)		酒	ビナ			
北槎異聞	1793	酒	ウヲツカ			
北槎聞略	1794	亀酒 (*注)	ピノ			*アラ酒と読む。
		濁酒	ピワ			
		拂郎察国より出る焼酒	フランツース ウヲーツカ			
魯西亜寄語		美酒	ウウヲツカ			
		亀酒	ピノ			
		濁酒	ピワ			
		拂郎察国より出る焼酒	フランツース ウヲーツカ			
魯西亜辨語	1796	酒	ウヲツカ	又ピノ		
漂流私記	1794-95	酒	ビナ			
北洋実録	1804以降	酒	ヒナ	ウヲツカ		
魯西亜詞記	1798-	酒	ピノ			
環海異聞	1807	焼酎	ケレプユ (*注)	オ、ツカ	麦類蒸餅に作りたる物凡てケレプといふなり (*注)	*クレープに相当する。
		蒸酒	ケレプト	ケレプ		
		上好酒	オ、ツカ			
		麦酒	ウイナ			
おろすけ人言	1829	酒	ピナ			
幽囚松前ゴロウニン口述露語控	1813	酒飲され	ウヲツカ ビ テヤ			
魯齊亜国漂流聞	1814	酒	ボウツカ			
魯西亜漂流記	1817	焼酎呑ム事	ウヲツカペイ			
		酒ノ事	ピノヲ			
時規物語	1849序文	酒	ウヲツカ			
		焼酎	スペリ	スペル		
		麦酒	ウイナ			
		上質の	チェン			
		麦酢	クワス			
魯西亜字筈	1855	サケ	В И Н О イ ノ			
五国語箋	1860	酒	В И Н О イ ノ			

ロシア学資料においても「酒」に「В И Н О」(ワイン)があてられることが多い。『北槎聞略』などでは「濁り酒」が「ビール」に対応させられていることはタタリノフ資料と同様であった。『北槎聞略』の漂流民は仙台の人たちであるから、『レクシコン』と同様の

東北の地域性を反映していると思われる。上等な酒としては「ウヲツカ」が当てられていた。

一方、『環海異聞』や鹿児島永寿丸の資料『魯西亜漂流記』では「焼酎」が見出し語として上がっていて、これには「ウヲツカ」で訳されていた。ビールと製造法が似ているクワスには「酢」類の訳語が当てられていた。

明治以降、古い漢語を再利用して新しい概念を与えたり、新たに造語したりするというような方法が発生した。しかし、江戸時代の漂流民や帰還者の翻訳は、自分の言葉を利用してなるべく近い日本語をあてるという、まったく違う方法で翻訳を行なっている。ロシア学資料に携わった者には森島中良や馬場佐十郎などの蘭学者も多い。しかし蘭学者であっても、当初は日本語にある語彙を利用して翻訳していたという点は興味深い。

その「自分の言葉を利用して」という点において、自分の方言が露呈するというのも当然であるが、あらためて今回の調査のように鹿児島のゴンザ資料では「焼酎」「泡盛」「酒」が出現するが、タタリノフ資料では「酒」「濁り酒」のように日本酒の範囲内で翻訳が行われるという相違が見られるのも興味深い。

5. 結論

本研究はロシア資料を利用し、これらに記録されている江戸時代の嗜好品の具体例、嗜好品への意識や嗜好品を取り巻く文化、関連する語彙について考察することを目指した。江戸時代の日本人がロシアの酒類や煙草文化についてどのように感じて、どのように翻訳したのか、日本の文化とどのように対応させたのかを明らかにすることによって、現代のようなさまざまな酒類や煙草類の影響がなかった時代の、嗜好品への意識を明らかにすることを目的とした。このような視点からの研究を行ったことがなかったので、大変興味深く取り組むことができた。

結論としては以下のように要約することができる。

ゴンザ資料では「酒」「甘酒」「焼酎」「泡盛」というように多様な酒の種類が見つかったが、タタリノフ資料では「酒」「濁り酒」「諸白」といった、「日本酒」の枠内にかざられた語彙が見つかっただけであった。これは当時の地域性、鹿児島と青森下北の違いを反映したものである。

また現代の鹿児島で「酒」といえば焼酎を指すが、18世紀の鹿児島では「酒」は「日本酒」を指していた。古くは日本酒が無標で「酒」、焼酎が有標で「焼酎」と呼ばれたのに対し、現代では焼酎が無標の「酒」、日本酒が有標で「日本酒」と呼ばれる、というように関係が逆転したのではなからうか。九州北部では「酒」といえば「日本酒」を指するのが普通である。したがって、「酒＝日本酒」が古い語彙体系であったと思われる。この「酒＝日本酒」体系は、18世紀以降に鹿児島で「焼酎」が一般的になり、大いに普及したことによっ

て「酒＝焼酎」体系へと転換していったものと思われる。

青森下北方言を反映する『レクシコン』では、「ウオトカ」に「諸白」、「ワイン」には「酒」、「ビール」には「濁り酒」という訳があてられていた。

18世紀において、薩隅方言と青森下北方言においてワインに日本酒が対応させられていることが明らかとなった。現在、日本酒を海外展開する方向の一つとして、ワインの味に似せるという方向があると思われるが、ワインと日本酒が似ている、という直感は既に18世紀の日本人にも存在していたと思われる。ゴンザ資料ではウオトカに「泡盛」が対応させられていることもあわせて興味深い。

ビールに「甘酒」「濁り酒」が対応させられていた。このことから、18世紀ロシアのビールが甘く濁ったものであったことがわかる。特に「甘酒」と訳してあることは、ロシアでは近年までビールを清涼飲料水として扱っていたことを想起させる。清涼飲料水という点では「甘酒」と同様である。

ビールと同じ材料・製法を持つクワスについては、ロシア学資料では「麦酢」と翻訳され、日本人はクワスを酸味のある「酢」と捉えていたかもしれない。酒の範疇にならなかったかもしれない。

明治以降、海外からの新しい概念に対して従来からの漢語に新しい意味を与えて再利用したり、新たに造語したりして翻訳を行っていた。しかし(A)の外国資料においては、自分たちが使っている言葉の中から、比較的に対応する語を当てて訳していることがわかる。これは(B)ロシア学資料においても同様であった。

『レクシコン』の喫煙関係の語彙を調査した結果、「噛み煙草」に「カド」(身欠きにしん＝乾燥させたニンシ)の訳があててあった。「噛み煙草」は日本に普及していなかったためか、味の共通点より口に含む行為の共通点がほうが目立ったのであろう。西洋において、火気厳禁の船内では「噛み煙草」が用いられていたと思われる。

また18世紀のロシアの船員の間では煙草が「壊血病」への薬効があると考えられていたと思われる。

ギヤマン煙管に相当する「ビンズギリ」という語が青森下北方言に存在したことがわかった。

以上のように結論されるが、今後を持ち越された課題もある。「煙草が壊血病に有効であると信じられていたこと」は大変面白かったが、個別の事例の指摘にとどまってしまった。

下北地方でギヤマン煙管の方言形「ビンズギリ」が用いられていることが判ったが、それが日常品として用いられたのか、贅沢品として用いられたのか、商品名としてあっただけなのか、そういった面からの考察も必要であった。

ウオトカを「泡盛」と訳しているが、蒸留してアルコール度数の高いというだけの共通性なのか、それとも味や使用場所に関しても共通性があるのかなど、もう少し考察する必要がある。

ゴロウニンの『日本幽囚記』を通読すると、「ウオトカ」や「フランス製ウヲトカ」が日本人に好まれたことが分かる。そして実際、「ロシア学資料」にもそれらの語彙が記載されている。さらに範囲を拡大して様々な資料を歴史的に、そして方处的に、立体的に繋ぎ合わせてみるということも今後の課題である。

こうして個々の語の対応関係や、個々の事例を明らかにすることにとどまり、そのことが持つ文化史的な意味や社会的な意味を十分に掘り下げることができなかつたり、それぞれの用例を時間的に、方处的に、立体的に組み合わせるまでに至らなかった。個々の事例を丹念に積み上げる作業は出来たものの、最終的に全体を統合して文化論として体系化するところまでは到達できなかったのはまことに残念であった。

また漂流民の記録としては石巻漂流民への調査記録『環海異聞』や大黒屋光太夫への調査記録『北槎聞略』などがある。これらは（B）として紹介した。

（B）の中の『環海異聞』には「この邦の人、多くは喫煙しない風俗である。上流の人はまれに一、二服ずつなぐさみにのむ様子である。ヤコーテやブラーツクは甚だ好んで吸う。ロシアの女子は絶えて喫煙する者がいない」とか、「酒はすべて麦醸酒である」¹⁰、というような記事がある。

『北槎聞略』の中には「嗅ぎ煙草」「鼻煙盆」「ビール」「焼酒」「コーヒー」「茶」などの記事がある。たとえば『環海異聞』の記事は煙草の使用に関して身分差や男女差や地域差があったことがわかる。

これらはロシアの風俗について述べたものであるので、今回は省略したが、今後の展望としてはこうしたものも視野に入れて進めていくなれば、より立体的でダイナミックな文化交渉が描けるのではないかと考えている。

ゴロウニンが捕縛された際に、お茶の種類に言及している。粗末でまずいお茶、香りのあるお茶などが区別されているというのである。酒についても同様に「ウヲトカ」と「フランスのウヲトカ」が別扱いされている。こうした実際の場の概念を導入することで更に問題が深まったであろう。少なくとも、こういった問題点や問題意識にたどりついたということは本研究のささやかな成果であるかもしれない。今後、更に研究に努め、今後の課題にさせていただきたい。

6. 参考論文

- ・池田皓 1989 『環海異聞』（雄松堂、海外渡航記叢書2）
- ・いぬかいて 2016 「ゴンザの『新スラヴ日本語辞典日本版』（1985）の訳注の問題点」（日本方言研究会第102回研究発表会発表原稿、2016.5.13、学習院大学）

¹⁰ 池田皓 1989 による。

- ・石川真弘ほか 1970「魯西亜語類」(『ビブリア』45、天理図書館)
- ・井上史雄 1976 「集落内の言語差一下北半島上田屋一」(『人文科学論集』12)
- ・岩井憲幸 1986『『環海異聞』卷之八言語第二十二についてーロシア語の片仮名表記法を中心としてー」(杉本つとむ 1986 所収)
- ・岩井憲幸 1998「日本におけるロシア語学習・研究の最初期についてー記述の試みー」(『明治大学教養論集』304)
- ・岩井憲幸 2000「先駆者たち」(『日本人とロシア語』ナウカ)
- ・岩井憲幸 2000「ロシア語辞書の歴史 明治期以前」(『日本人とロシア語』ナウカ)
- ・岩井憲幸 2005「幕末・明治初期成立のロシア語語彙集の研究」(『明治大学人文科学研究所紀要』56)
- ・岩井憲幸 2009「幕末ロシア語研究の新出資料についてー国学者平田篤胤のロシア語資料ー」(『明治大学人文科学研究所紀要』65)
- ・岩井憲幸 2010「鈴鹿市所蔵『魯西亜詞記』の翻刻」(『明治大学教養論集』457)
- ・岩井憲幸 2011「大黒屋光太夫・小市・磯吉に関する資料の研究」(『明治大学人文科学研究所紀要』第68冊)
- ・岩井憲幸 2014「ロシア学資料」(『日本語大事典』朝倉書店)・江口泰生・駒走昭二 1997『図解感覚世界』(鹿児島県立図書館)
- ・江口泰生 2002 文部省科学研究費報告書『十八世紀薩隅方言における音節・音配列構造と語形式の研究』所収『友好会話手本集』
- ・江口泰生 2006 『ロシア資料による日本語研究』(和泉書院)
- ・江口泰生 2013 「ペトロワの『レキシコン』研究について(前)」(『岡山大学文学部紀要』60)
- ・江口泰生 2014 「ペトロワの『レキシコン』研究について(後)」(『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』37)
- ・江口泰生 2014ほか 2014 「A. タタリノフ『レクシコン』注釈1 (A~B)」(『岡山大学文学部紀要』62~2016「A. タタリノフ『レクシコン』注釈8 (Y~X)」(『岡山大学文学部紀要』66)
- ・江口泰生 2014「ロシア資料」(『日本語大事典』朝倉書店)
- ・江口泰生 2017 予定「露語資料」(『日本語学大辞典』東京堂出版)
- ・大熊規矩男 1950 『新農業全書第4冊 煙草の栽培』朝倉書店
- ・大友喜作解説校訂 1944『北門叢書』第6冊 北光書房
- ・亀井孝 1986 『亀井孝論文集5 言語文化くさぐさ』吉川弘文館
- ・亀井高孝 1964『人物叢書 大黒屋光太夫』吉川弘文館
- ・河合忠信「魯西亜語類」(『ビブリア』45、天理図書館)
- ・木崎良平 1971「安芸の久蔵の「魯西亜国漂流聞書」(資料紹介含翻刻)」

(『鹿兒島大学史録』 4

- ・ 木崎良平 1980 「『漂海紀聞』のロシア言語篇について」(『立正大学文学部論叢』 68)
- ・ 木崎良平 1982 『永寿丸魯西亜漂流記』 明玄書房
- ・ 木崎良平 1982 「江戸期漂民ロシア語書」(『立正大学人文科学研究所年報』 20)
- ・ 木崎良平 1990 「大黒屋光太夫の『漂流私記』」(『立正史学』 68)
- ・ 木崎良平・井田好治共編 1965 『漂海紀聞－文化九／十三年薩摩永寿丸カムチャツカ漂流記－』(鹿兒島大学教養部歴史研究室)
- ・ 亀田次郎 1923 「魯国創刊日露辞典及其編纂者」(『國學院雜誌』 大正 1 2 年 1 1 月号)
- ・ 加茂儀一訳 1952 オーギュスト・シュヴァリエ、フランク・エマニュエル共著『タバコ』(文庫クセジュ、白水社、1952 加茂儀一訳)
- ・ 『教会スラヴ語ロシア語辞典』 1847
(СЛОВАРЬ ЦЕРКАВНО-СЛАВЯНСКАКАГО И УССКАГО ЯЗЫКА)
ロシア帝室アカデミー第 2 部会 1989 の大空社から複製版による。
- ・ 古賀十二郎 1966 『長崎洋学史 上巻』 長崎文献社
- ・ 駒走昭二 2015 「薩摩ことば－通セサル言語」(鈴木彰・林匡編『島津重豪と薩摩の学問文化 近世後期博物大名の視野と実践』所収、勉誠出版)
- ・ 佐井村役場編纂 1971 『佐井村誌』
- ・ 新村出 1914 「伊勢漂民の事蹟」(『新村出選集』 2、1951、養徳社による)
- ・ 杉本つとむ 1986 『環海異聞 本文と研究』 解題 八坂書房
- ・ 杉本つとむ 1967 『近代日本語の新研究』 桜楓社
- ・ 杉本つとむ 1976-82 『江戸時代蘭語学の成立とその展開 I～V』 早稲田大学出版部
- ・ 杉本つとむ 1986 『環海異聞 本文と研究』 八坂書店
- ・ 杉本つとむ編 2000 『五国語箋』(皓星社)・村山七郎 1965 『漂流民の言語』 吉川弘文館
- ・ 兎内勇津流 2009 「箱館の領事館員イワン・マホフ「ろしやのいろは」をめぐって」(『はこだて外国人居留地研究会会報』 6)
- ・ ナウカ 2000 『日本人とロシア語』(ナウカ)
- ・ 中村喜和 1967 「馬場佐十郎と魯語」(『日本ロシヤ文学会会報』 10)
- ・ 中村喜和 1977 「『魯語文法規範』考」(『一橋論叢』 77 卷 3 号)
- ・ 中村喜和 1986 「『和魯通言比考』成立事情瞥見」(『国語史学の為に』 笠間書院)
- ・ 村山七郎編 1985 『新スラヴ日本語辞典』(協力者井桁貞義・興水則子、ナウカ書店)
- ・ 平野満 1993 「馬場佐十郎のロシア語書簡和解－ゴロヴニンへ就学以前－」(『駿台史学』 89)

- ・藤田福夫 1985「大黒屋光太夫配下磯吉の滞露体験記『極珍書』について」(『椚山女学園大学研究論集』16号第二部)・横田忠夫 1967 『煙草栽培地域論』東洋経済新報社
- ・松村明 1964「幕末期ロシア語学書についての覚書」(『文学・語学』32、のち『洋学資料と近代日本語の研究』東京堂に再録)
- ・村山七郎 1967「加藤肩吾「魯西亜実記」(魯西亜紀聞)の文献学的研究」(『順天堂大学体育学部紀要』10)
- ・山下恒夫編 1992-93『石井研堂これくしょん 江戸漂流記総集』全6巻…「これくしょん」と略す。
- ・山下恒夫編 2003『大黒屋光太夫史料集』全4巻(日本評論社)…「光太夫史料」と略す。
- ・ペトロワ 1962 (O.ПЕТРОВА 1962) “«ЛЕКСИКОН» РУССКО-ЯПОНСКИЙ Андрея Татаринова”
ИЗДАТЕЛЬСТВО ВОСТОЧНОЙ ЛИТЕРАТУРЫ, МОСКВА, 1962

参考資料

- 大友喜作解説校訂 1944『北門叢書』第6冊 北光書房
早稲田大学附属図書館デジタル資料…「早大図」と略す。
国文学研究資料館電子図書館…「国文研」と略す。
函館市中央図書館デジタル資料館…「函館図」と略す。
北海道大学北方関係資料総合目録…「北大図」と略す。
『日本庶民生活史料集成』第五巻(三一書房 1968)…「生活史料」と略す。
『マイクロフィルム版初期日本 蘭仏独露語文献集』雄松堂…「雄松堂マイクロ」と略す。

ウェブからの引用

- ・沖縄県酒造組合「泡盛百科」 <http://www.okinawa-awamori.or.jp/about/03.html>
- ・ニフティ・ブログ「たそがれをかがやいて」2004.2.13
<http://kurashidaisuki.la.coocan.jp/kurasi.2/k2-13.html>(2017.6.13 確認)
- ・GMO ブログ「馬オタクでミスチル馬鹿の日記」2006.12.7
<http://mike2004.jugem.cc/?month=200612>(2017.6.13 確認)
- ・「よこはまふらのつれづれぶろぐ」2010.5.5
http://470830.at.webry.info/201005/article_3.html(2017.6.13 確認)

(謝辞) 本研究をなすにあたり、TASC 研究助成金の支援を賜り、また審査員の先生や報告会でのご質問を下された先生方からは的確なご指導ご鞭撻を得た。また JSPS 科研費基盤 c

-26370536 「十八世紀青森下北方言を反映するタタリノフ『レキシコン』についての文献方言史的研究」の支援を得た。全てに記して感謝申し上げます。

7. 英文アブストラクト

Predominant food culture in the records of documents that recorded by people drifting to Russian during the Edo period

EGUCHI Yasuo
KOMABASHIRI Shoji
KUBOZONO Ai

Abstract

In this study, I considered an interlinear translation of the luxury goods that are reported in Gonza documents(recorded in Kagoshima dialect) and Tatarinov documents (recorded in Aomori Shimokita dialect).the following results were obtained:

1) The various kinds of liquor recorded in Gonza documents were “sake,” “amazake,”(i.e.,sweet drink made from fermented rice or sake lees) “syuu-tyuu,” (i.e., Japanese spirits), and “awamori.”(i.e.,rice brandy) .The various kinds of liquor recorded in Tatarinov documents were “sake,” “nigori-sake” (i.e.,raw sake), and “morohaku” (i.e.,high-quality sake). “Sake,” “nigori-sake”, and “morohaku” were same category as “sake” (i.e., Japanese liquors).

This variety of liquors reflects the local conditions in those days.

2) In the modern Kagoshima dialect, the word "sake" means "shochu".In the

Kagoshima dialect of the 18th century, the word "sake" means "sake".

3) In Tatarinov documents, “vodka” was translated into “morohaku ,” “wine” into “wine,” and “beer” into “nigori-sake.”

4) In the 18th century, the Japanese thought wine and sake were similar.

5) In the 18th century, Russian beer was sweet and impure.

6) In Tatarinov documents, chewing tobacco was translated into the word “kado” (i.e.,the dry herring).

7) In the 18th century, there was a common belief among Russian sailors that cigarettes had therapeutic effects on scurvy.

8) In the 18th century, the glass pipe was called “binzu-giri” in the Aomori Shimokita dialect.